

支部だより

九州支部

九州支部の OR 活動は、研究会活動による経験交流と機関紙“OR 九州”の発行・会員配布に要約される。

1. 研究会活動

(A) 九州 OR 共同研究会

参加会社——9社

年4回

運営は幹事会社持回り

現在 38 回、ますます好調

(1年間の活動内容)

1. 事例発表

財務シミュレーションモデルについて
 コントロールセンター設計機械化について
 タクシー業務のシステム改善
 送電線支持物管理方式の検討
 化学プロセスの経済評価について
 染料の生産計画について
 技能教育の工学的アプローチ

倉庫管理業務の改善

2. 工場見学

安川電機中間鍛造工場

三菱化成黒崎工場

黒崎窯業

3. 講演

システムズ・アプローチ

(B) 福岡地区 OR 研究会

参加会社——3社

年4回

運営は幹事会社持回り

現在 30 回

2. 機関紙“OR 九州”の発行・会員配布

会員各位の協力により、順調に発行をつづけ、現在 15 号、年4回の発行を堅持している。

内容は、何でもよいことになっている。随想、論壇、巻頭言、事例 etc.…。その他研究ニュース、会員だより。一番誇りに思うことは、必ず年4回発行していること。

会員の声

OR の 将来——1

現代はオペレーションズ・リサーチの時代である。公害問題、環境問題、都市問題、教育問題、すべて問題でないものはない。しかもその問題の模範が大きくなるとともに、いずれも既成の学問分野の枠からはみ出てしまっている。インターディシプリナリ・グループがもてはやされるゆえんである。そのために政府は、情報処理技術の振興に国費を注ぎこみ、ソフト・サイエンスという新語さえ生まれた。MIS はどうやら一過性の熱病だったらしいが、その提起した問題はあい変わらず残っているし、その中核がオペレーションズ・リサーチにあることも論をまたない。しかも今やたしか情報化社会の幕が上がるところだったはずである。

このように見てくると、まさに現代はオペレーションズ・リサーチの時代であるという冒頭の言葉が納得される。しかし、前述の動きに対して、『経営科学』、*JORSJ* の誌面にはまたあまりにも旧態依然たる“OR”論文しかのらないのはなぜだろうか。OR 界で名の売れた先生方が、上記のような動きに、どの程度実質的に参加されているのか、私は知りたい。

一方、自動制御、情報処理、通信等の専門誌をのぞけば、かつて OR の技法といわれていたものが、今や工学全般の共通技法の一つとして利用されていることに気がつく。おそらくこのような論文の筆者は、その個々の技法については知っていても、これを OR の一部とは感じていないにちがいない。単に自分の問題を解くのに便利な一手法として、たまたま OR で開発された技法を用いたというのにとどま